

課外プロジェクトとしての小学校英語指導について

— 参加児童の評価および参加学生の変化について —

吉 田 真 美
相 川 真 佐 夫

〈Summary〉

This paper reports on extra-curricular projects carried out in the 2012 academic year in the TEFL (Teaching English as a Foreign Language) program at Kyoto University of Foreign Studies. The paper first provides a brief overview of the TEFL program and the extra-curricular projects in the 2012 academic year. The projects include teaching English at two primary schools. Two kinds of research were conducted in order to analyze the impact and positive effects the projects had. One form of analysis was the evaluation of English activities by primary school students. Twenty students completed a questionnaire about the English activities they had experienced. The results showed that they were so positively influenced by the projects that some of them are looking forward to the following year. The other research analyzed how much influence the project had on college students' teaching skill and attitudes. Eight college students who participated in the projects were interviewed. The results were qualitatively analyzed, and they showed significant improvement in students' teaching skill as a result of teaching and observing their peers. Another finding showed increased confidence using classroom English, especially among those who had never been abroad. The teaching experience offered them good opportunities to use English in an appropriate situation.

Finally, the impacts of the projects on pre-service teachers' professional development will be discussed. Implications for further development of language teacher training will also be explored.

1. はじめに

1.1. 経験学習としての小学校英語指導ボランティアプロジェクト

本学の英米語学科における英語教育研究 (TEFL) コースは、教職のための必修科目以外に以下の3分野から研究科目を、12種類開講してきた(詳細は、相川, 他, 2011 参照)。

- (1) 教師としての演習型パフォーマンス・スキル(模擬授業, 演習, 研修などの活動を通して英語教育に特化した言語操作能力)を養成する。
- (2) 講義やディスカッション, 文献講読などを通して「外国語としての英語教授法」の基本的な理論及び関連分野に関する知識を身につける。

- (3) 授業観察や内省、アクションリサーチなどの活動を通して専門職としての外国語指導者にとって必要な意識や態度を養う。

英語教育研究 (TEFL) コースには英語教員を養成するための科目が豊富に設置されているが、学んだ専門知識や技術を、実際の指導現場で試行する場を提供する授業が少ない。そのため、課外活動として小学校英語指導ボランティアプロジェクトを2009年より開始した。

この背景には、近年の言語教師養成の分野において、教師の学びが従来の受け身の学びから、自律的に知識を構築していくアプローチに重点がおかれるようになったことがある。多くの専門家は、指導実践を行いその後に省察を行う循環を繰り返すことに焦点を当てた学びのモデルを提案している (e.g. Wallace, 1991)。この傾向に大きな影響を与えたと考えられる Kolb (1984) の学習理論は「学習とは経験の変換によって知識が形成される過程」とし、その過程を具体的経験、反省的観察、抽象的概念化、活動的実験という4つの学習モードが循環するサイクルとして経験学習のサイクルを提唱している。すなわち教育現場に入り様々な経験をし、その経験を様々な角度から振り返り、観察した事実を理論的かつ概念的に理解し一般化をするというサイクルである。得られた理論や概念を使って現場の問題を解決すべく実行に移すことで、また新しい経験に出会い、次なる新たな知識の獲得につながっていくのである。この実践から振り返りの循環を外国語教育分野に取り入れた Wallace (1991) は、内省的、自己研鑽的また自己成長型の教師を養成するために、学習して身につける知識 (received knowledge) のみならず実際経験して得た知識 (experiential knowledge) を合わせ持つことが重要であると主張している。対象言語の言語システムや教授法の知識に加えて、実際の授業実践を通して得られる経験的知識を持って実践と内省を繰り返すことで実践指導力が身につくという考えである。そこで本 TEFL コースでは、実践経験を多面的に分析検証できる手法を身につけることが実践指導力を高める効果的な方法であると考え、ボランティア活動はそのような「実践経験 → 内省」のサイクルを経験できる重要な場を提供するプロジェクトであると位置付けている (図1参照)。

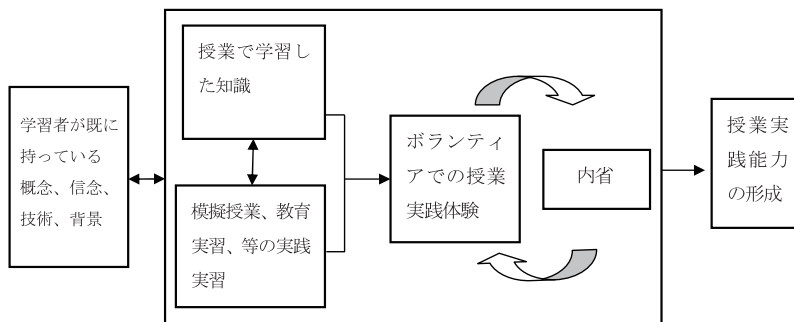


図1: TEFL コースにおける小学校英語指導ボランティアでの学習モデル

Kolb (1984) や Wallace (1991) で主張されるように、実践後の「内省」は具体的な経験を考察の対象となる事実に変換し、さらに知識を生み出す経験に変換する過程となると考えられる。このプロセスを提供できるという意味で、TEFL コースにおいて小学校英語指導ボランティアはカリキュラムを補強する重要な役割を果たすと考える。

1.2. 研究の目的と研究方法

本研究では、教員養成という観点からこの活動が学生に与える影響を明確にすることに加え、この活動の学びをより豊かにするための改善点を明らかにする。そこで以下のリサーチクエストションへの回答を試みるために、インタビューと同時に参加児童や参加学生へのアンケートを行う。

- 1) 小学校での指導体験が参加学生の指導技術と意識にどのような影響を与えたか
- 2) 教育養成の効果を高めるために活動はどのように改善されるべきか

類似した研究として、石上、他 (2012) がある。石上、他は教員志望の大学生が学内のイベント「放課後ものづくり教室」に活動支援者として継続的に参加することによる「体験からの学び」を明らかにしようとした。インタビューとアンケートの結果は、参加目的のパターンを明らかにしただけでなく、質的に大きな違いがある二段階の「学び」があることを確認した。一次的学びとは過去の体験についての話者の自己内省が完了しすでに意味づけられた学びであり、二次的学びはインタビューアとの相互行為によって話者の内化が促進され、新たに意味づけられた学びである。このようにインタビューアと話すことによって初めて意識化され、効果が明らかになる二次的な学びを把握するためにも、本研究でも一方的に質問に答えるだけのアンケートだけでなくインタビューを用いた事例研究を行うことが必要と考える。また、Liu & Fisher (2006) では、9か月の教育実習中の実習生の変化を事例研究として報告している。その結果、指導力や教師としての意識の変化は調査参加者間で同じようなパターンが見られたが、生徒との関係や生徒の目に映る自分自身のイメージについては実習生によって大きく異なっていたことが明らかになった。これは教師と生徒との関係といった社会的要因に加え、実習生にとっての振り返りの役割や、一緒に活動を振り返る相手との関係等が影響しており、振り返りによって生じる情意的側面の原因が大きく貢献していることが指摘された。このように実践体験を個人がどのように振り返り、実践から得た示唆をどのように受け止めているかを知るだけでなく、どのようなきっかけでそのような学びとして意識するようになったか等も知ることは、本プロジェクトが教職志望の学生に与える影響を知るうえで重要である。さらに、特定の協力者の体験やそれにまつわる意識の変化やそこにかかわる人物や出来事などを深く知り得る事例研究を行うことも重要であると考える。

2. 小学校英語指導ボランティア

2.1. 背景と概要

京都市立上高野小学校では、土曜日に設けられている土曜学習という地域住民のボランティアによる教育補助活動の一環として本学の学生による英語活動を実施している。

土曜学習会の試みとして、ほぼ毎月1回のペースで、土曜日の10:00~11:00の時間帯に60分間の英語活動を年間8回実施している。対象は4, 5, 6年生の希望者から構成された約20名の2クラスである。この土曜学習会を利用したボランティアプロジェクトには、本学(京都外国語大学・京都外国語短期大学)の学生約50名(英米語学科, 他学科, 短期大生)が登録しており、毎回6~8名の学生のみで構成するチームで英語活動を指導している。

一回の英語活動を実施するにあたり、初回のテーマや活動メンバーの決定のためのミーティングから、指導案や教材・教具の作成、及び実技の練習等で、準備に約1カ月(約25時間~40時間)を要している。テーマと主な活動は本学の教員の助言を受けながら参加学生が主体的に活動の詳細を決定し、指導案の作成や教具の作成も行う。活動パート毎に責任者を決定し、同じパート担当者で協議や作業及び練習を行い、個人別またはパート別に実技練習を行う。実施直前はクラス別に活動の最初から最後まで通してリハーサルを何度か行い、教員も助言を与えるが、お互いに問題を指摘し合い、実技指導を頻繁に行う。なお、英語活動終了後には後片付けと反省会を行う。英語活動の指導において、基本としている流れは、以下の通りである。

- (1) 挨拶及びウォームアップ
- (2) テーマとターゲット構文の導入(寸劇や絵本読み聞かせ, 等)
- (3) ターゲット構文や単語の確認
- (4) 定着のためのドリル(チャンツや歌, ゲーム)
- (5) 活動1(ターゲット構文の理解またはリスニング活動を促す活動)
- (6) 活動2(ターゲット構文の産出またはスピーキング活動を促す活動)
- (7) まとめ

2.2. 2012年度の小学校英語指導ボランティアプロジェクトの活動

2012年度は、京都市立上高野小学校において行った8回の英語活動に加えて、高槻市立安岡寺小学校においても通常の外国語活動の時間帯を利用し、本学学生による英語活動の指導を行った。表1は上高野小学校での英語活動内容をまとめたものである(詳細は、相川, 他, 2013参照)。

表1：上高野小学校での英語指導内容

実施月とテーマ	ターゲット表現	導入・準備活動	メイン活動
5月 箱の中身は？	In the box, there is ~	絵本 “In the attic” 読み聞かせ → 音読 → 歌: “There is a ball in the box on the desk.”	ゲーム箱の中身は？ → 鞆 の中身報告
6月 田植え	What do we do in June? We plant rice.	寸劇 → 月の表現, ターゲット 表現導入 → ジェスチャー ゲーム	稲作りレー
7月 紙飛行機タッチ フット (体育館)	Here we go. Go far. Go right. Go left. Come closer. I got it. I missed it.	ルール説明と表現導入 → TPR	紙飛行機タッチフット
10月 ハロウィーン	We are monsters, trick or treat. You are a vampire.	お化け紹介 → モンスター チャンツ	お化けマンションで Trick or Treat (本校舎教室)
11月 道案内で世界旅行	Turn right. Turn left. Go straight.	道案内表現の口頭ドリル → 列対抗兵隊さんゲーム	グループ対抗英語オリエン テーリング
12月 サンタになろう！	What do you want for Christmas? I want ~ for Christmas.	寸劇 → チャンツ → プレゼン ト記憶ゲーム	クリスマスプレゼント配達 ゲーム
1月 人間すごろく	Can you sing ~? Yes, I can.	寸劇 → ルール説明	人間すごろく (体育館)
2月 I love you.	I love you. Thank you for cooking for me.	絵本 “I Love You Forever” 読 み聞かせ, カルタ	バレンタインカード作り → 修了書授与

2.3. 活動内容 (詳細)

一単元の活動内容の特徴をより具体的に示すために、11月に実施した「道案内で世界旅行」について詳しく報告する。なお、ここでは2012年11月に安岡寺小学校で実施した同英語活動について報告する。

高槻市立の安岡寺小学校6年生の2クラスに対して、通常の英語活動の授業において本活動を実施した。テーマは当該小学校で学習中であった「道案内」を選び、応用した活動を展開することを目指した。本活動は道案内に必要な基本的な表現を聞いて理解し、場面に応じて適切な指示が口頭で行えることを目指すことに加え、世界の国々の首都や代表的な建造物について学ぶという小学校社会科の授業内容を盛り込んだ。以下が主な活動の流れである(付録1参照)。

- 1 挨拶と自己紹介
- 2 スキットによる導入 (各学生が訪問したい国を述べて、その国の首都や主要建造物について対話し、別の学生による英語による道案内の指示に従って目的地に到達する)
- 3 表現の確認と口頭ドリル (本活動のターゲット表現である Turn right. Turn left. Go straight. を大きな矢印が記された視覚教材を用いて確認後、方向と表現を結び付けて理解を図る)
- 4 列対抗兵隊さんゲーム (2列に分けた児童に目を閉じさせて、英語で方向の指示を何種類か与えた後に目を開けさせ、いかに列を乱さず直線に近いかを競う)

- 5 英語で世界首都オリエンテーリング（グループ内でガイド役と旅行者に分かれ、体育館に描かれた巨大地図の上を、ガイド役の指示に従って、旅行者役を目的地に到着させスピードを競う。ガイド役は目的地と通過しなければいけないルートが明示された地図を頼りに英語で旅行者を導き、旅行者役の児童は各通過地点でチェックを受けるためのパスポートを持って仲間の英語による指示に従いながら進む。目的地に到達したら設置してある箱の中をのぞき、その国の主要建造物等のヒントを参考に、どの国に到達したかを指導学生に伝える。第二ラウンドは役割を交代する）

3. 参加児童による評価 アンケート

3.1. 背景と方法

土曜英語活動に参加した児童が、英語活動や指導にあたった学生をどのように評価しているかを明らかにするために、アンケート調査を行った。

アンケートの実施日は2012年度の英語活動最終日にあたる2013年2月16日（土）で、活動終了時に任意参加として行った。回答件数は当日参加者20名全員で、これは土曜英語活動の登録者総数の約70%にあたる。

質問内容は以下の項目についてであった（付録2参照）。

- (1) 各月の英語活動内容の楽しさ
- (2) 英語活動を他人にすすめたいか
- (3) 指導にあたった学生への印象

回答者が小学生であることを考慮し、できるだけ児童に回答しやすい方法を選んだ。その結果、(1)と(2)については、リッカートスケール5件法、その他の項目については予め用意した選択肢から選ぶ方法および簡単な記述とした。なお、(1)の英語活動については、すでに半年以上も経過しているものがあるため、写真により当時をふり返りながら回答する形式を取った。各月の英語活動のテーマは以下のものである（表1参照）。

5月「箱の中身は？」 6月「田植え」 7月「紙飛行機でタッチフット」
10月「ハロウィーン」 11月「道案内で世界旅行」 12月「サンタになろう！」
1月「人間すごろく」 2月「I love you」

3.2. 結果と解釈

図2が示すように、各月における英語活動の楽しさ度の評価については、各回とも60%の児童が「とても楽しかった」、あるいは「楽しかった」と回答している。とくに7月、10月の活動

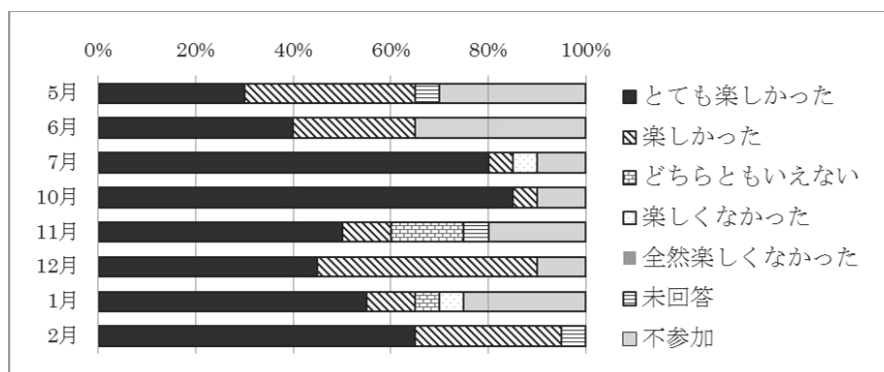


図2：各月における英語活動の楽しさ度の評価

に関しては、「とても楽しかった」の回答だけで8割を超えている。

いずれの月においても、「全然楽しなかった」との回答は皆無であったが、7月と1月においては、「楽しなかった」との回答が1件あった。これらについては、それぞれ「みんな3回やったけど、1回しかやらせてもらえなかった」、「寒かった」という理由を付記していた。

7月と10月については、活動場所が教室ではなく、体育館や学校内のさまざまな場所を利用したことが他の月の活動と異なる点であり、高評価につながった可能性がある。否定的な意見は、その場の環境によるもの、不公平感を感じるものに敏感なことから生じるものであったと言えるだろう。

次に、土曜英語活動を他人にすすめたいか、についての回答は、3名が「強くすすめたい」、16名が「すすめたい」と回答し、20名中19名までが肯定的な判断をした。その理由として、「活動が楽しかったから」が一番多い回答を得、その後「先生がよかったから」、「英語が好きになったから」と続く。「すすめたくない」との回答が1件あったが、「お母さんに言われたから」という理由であり、その真意は明らかではない。「英語力が伸びたから」という回答はわずか1件であったが、本来の英語活動の目的から考えると、この理由が少ないのは本活動の本質を抜本的に再考する必要があるのかもしれない。

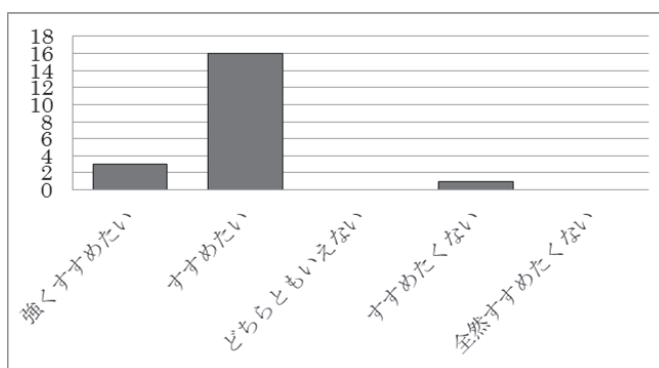


図3：土曜英語活動を他人にすすめたいか

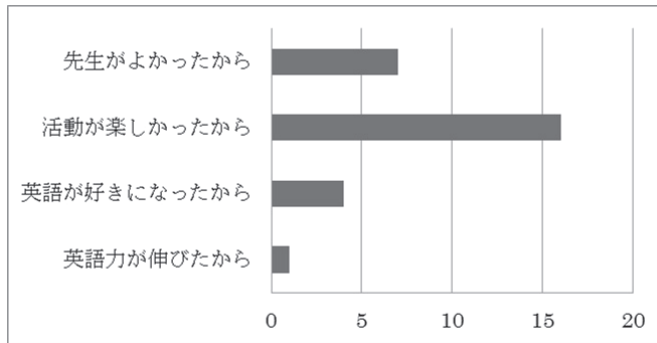


図4：他人にすすめたい理由（複数回答可）

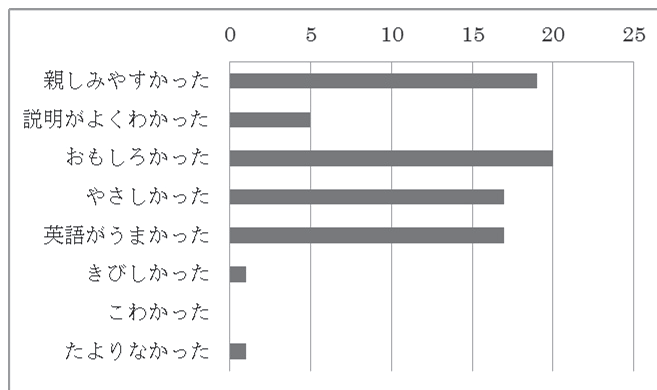


図5：先生はどうだったか

指導者となる参加学生に対する児童の評価については、図5が示すとおりである。「おもしろかった」、「親しみやすかった」、「やさしかった」など、児童との触れ合いやすさが数値として出ている。また、「英語がうまかった」という回答も多く、ある程度の英語話者モデルを提示できたのではないかと考えられる。逆に「たよりなかった」という回答が1件得られたが、初めて教壇に立った学生もいるので、適切な指示が出せずにいた点が児童に映った可能性がある。しかしながら、ほとんどの学生は教師経験がない故に、むしろ1件という数値は低いと解釈して良いのではないだろうか。

児童から得られた英語活動に対する総合的な感想は、「楽しかったです。また5年生でもいきみたいです」、「色々なゲームができて楽しかった。とくに、人間すごろくが楽しかった」など、楽しさに印象づけられた活動に喜びを感じているものが多かった。さらに、今後の希望として挙げられた回答は、「もっと体育館で遊びたい」、「遠足に行きたい」、「英語だけのスポーツ大会、旅行、クッキングがしたい」などで、非日常的な活動を求めているよううかがわれる。また、「英語をもっとしゃべりたい」という回答もあり、英語学習に対する動機付けを示唆する回答も得られた。

4. 参加学生の意識への影響：インタビュー

小学校での英語指導ボランティアプロジェクトが参加学生に及ぼす影響を調べるために、インタビューを行った。英語教員養成プログラムにおける指導の一環としての活動であるため、本来は指導技術における変化と意識や信条における変化の両方を分析すべきであるが、本稿では、紙面の制約の関係上、参加学生のインタビューから観察できる意識上の変化及び被面接者が自覚している技術上の変化について考察する。

4.1. 方法

インタビューの対象者は、本学の教職課程履修者で、筆者が募集した小学校英語指導ボランティアに登録している学生8名であった。本ボランティアの登録者うち、英語の教員免許の取得を希望していることと、3回以上活動への参加経験があることがインタビュー対象者の選考の際の条件とした。最終的にインタビューを行った学生からは、調査協力への同意を書面にて得ている。被面接者の基礎情報を表2に示す。

表2：インタビュー参加者の基礎情報（学年はデータ収集時のもの）

インタビュー参加者（性別）	学科・学年	活動参加回数	希望校種	留学経験や幼少期からの英会話経験等
S1（男）	英米語4年次	4	小学校	無
S2（男）	英米語3年次	3	高校	有・幼少より英会話
S3（男）	英米語3年次	6	小学校を検討中	有・幼少より英会話
S4（男）	英米語3年次	6	高校	無
S5（女）	英米語3年次	9	児童英語指導者	無
S6（女）	英米語3年次	4	中学校（小学校検討中）	無
S7（女）	英米語3年次	3	中学校	無
S8（女）	中国語3年次	5	中学校	有・幼少より英会話

インタビューは2012年度の3月に個人ごとに行った。形式は半構造化インタビューを採用した。趣旨説明や合意書等の書類への記入時間を含めて、所用時間は一人あたり25分から40分程度であった。インタビュー内容はICレコーダーで録音し、音声データを分析のために文字に起こした。インタビューでは主に以下の質問項目について尋ね、そこから発展した補足的質問も行った。

- ・ボランティア活動に参加する理由は？
- ・これまで何回参加しましたか？
- ・希望する教職の校種は何ですか？
- ・参加する前と比べてどのような変化が自分に見られたと思いますか？ また自信がつきま

したか？ 以下の項目であてはまるものについて述べてください（教え方、子どもへの接し方、クラスルームイングリッシュの使い方、英語の授業の組み立て方、教材作り、ボランティア体験として、大学生活における体験として、将来の進路に役立つ体験として、気持ち、自信、その他）。

- ・子どもから学んだ事は何ですか？
- ・英語活動を実際やってみて驚いたこと、意外だったことは何ですか？
- ・子どもに前で教えるにあたって疑問点、悩み、不安は何ですか。
- ・子どもに英語を発するようにさせるため、どのような工夫をしましたか？ あるいは、すればよいでしょうか？ 成功した例があれば教えて下さい。
- ・他のメンバーの実践から、参考になったことはありましたか？ 真似てみましたか？
- ・どのような活動がよかったと思いますか？ 具体的に参加した月やテーマを挙げて、理由も述べてください。
- ・この活動の問題点やもっとよい活動にするための提案はありますか？

4.2. 結果と解釈

4.2.1. 小学校英語活動ボランティアへの参加からの学び

被面接者がボランティアへの参加によってもたらされた変化として多く報告したことは、子どもへの接し方が上達した、授業の組み立て方が分かった、楽しめる教材作りのアイデアが得られた、人前で話す自信がついた、子どもに理解してもらいやすい指示の与え方が分かったなどである。授業の組み立て方がわかったというコメントはほぼ全員から得られたが、そのように判断できる原因はインタビューからは不明であった。おそらく先輩や先生から指示を受け、さらに英語教育法で勉強して、それが実感してきたのだと考えられる。

次に子ども達から学んだこととして、予想以上の積極性や好奇心、さらに恥ずかしくない、人に対して壁をつくらないなどの性質を挙げている被面接者が多かった。意外だったことは、子どもたちが予想以上に、英語を使用することが可能であったことであり、導入した英語表現や英語による指示や説明などを想像以上に理解していることを知り、ボランティアに参加する事によって子ども達の可能性に気づかされたようである。

4.2.2. 小学生に英語を教えることにおける問題点及び解決法

子どもに英語を指導する上での不安や疑問は、学生が使う英語や子ども達に繰り返させている英語を子ども達が本当に理解できているのかということ、自分の担当する少人数のグループ活動においておとなしい児童の発言をどのように促したら良いのか等の方略がまだ十分に養われていないことなどが挙げられた。

次に児童の英語の発言を促すために行っている工夫として学生から報告されたのは、クラスルーム英語で促す、日本語を用いる、不安を軽減するために励ましたり、順番を配慮したりする

などの方法であるが、その他に英語のセリフが言えなければ減点するなどのルールを作ったり、英語を使わざるを得ない活動の仕掛を考える等の方法が報告された。

また理解を促す工夫としては何度もしっかり言うように心がける、別の英語表現で言い直す、英語を聞かないと遂行できないタスクの仕掛け、手を叩いたり、指示に従う順番を競ったりと注意を向けさせるテクニックなどが報告された。

4.2.3. 参加学生による活動の評価

一番良かった活動という質問に対しては、完成度よりも自分が深くかかわった活動を挙げる傾向が強かった。教室の外に出て、体を動かした活動を選んでいく傾向がある。さらに前述した参加児童が高い評価をした活動と参加学生が良い活動として高い評価をした活動が一致していることから活動中の児童の反応も活動の良し悪しを決める基準となっていることがわかる。英語使用という観点から、英語活動の善し悪しを判断せず、児童が盛り上がった活動や教具作りに時間をかけたり、責任ある役割を担った活動等より主体的に関わったものを選ぶ傾向にあった。

4.2.4. ピアとのかかわり

参加学生のほぼ全員がピアからの学びは、大きいことを報告していた。子どもへの指示の仕方が得意な学生、落ち着かない子どもの注意を向け方が得意な学生、クラスルーム英語が自然で分かりやすい学生、教材作りのアイデアが豊富な学生など、特定の学生から共通の項目に関する学びを得ていることが分かった。

活動の運営上の問題点としては、ほぼ全員がミーティングの非効率さを挙げており、活動への思いの違い、指導方針の違いなどが原因であることが分かった。その解決法としてミーティングや反省会において教育指導方針を共有することや、リーダー的存在が必要であること等が提案された。

4.2.5. 活動参加回数をもたらず指導力の変化について

参加学生がこのプロジェクトから受ける影響は一様ではなく、参加学生のこれまでの経験や関わり方そして将来の展望などによって意識面だけでなく技術面の変化も異なるようである。教員志望で、留学経験や幼少からの英会話教室への通学経験がなく、参加回数が多い（6回～8回）学生（S4とS5が該当する）は以下のような特徴的な変化があったと考えられる。まずクラスルーム英語の上達を以下のように明示的に言及している傾向があると思われる。

「初めの頃は、当日話す英語を一字一句覚えたり、自分の担当するパートの流れも暗記したりすることで精いっぱいだったのですが、今となっては、もちろんある程度は前もって準備はしていますが、その場で英語はポンポンと出るようになってきたので、そういった所に関しては自信がついてきました。（S4）」

また S5 も S4 もクラスルーム英語の使用が自動化してきたことを実感しており、参加回数が増えたことがその原因であることも認識している。

「だいぶ使えるようになりました。何回も言っているので、言い慣れたということが大きいと思います。考えずにすら〜とでてくるようになりました。それと、褒め方も“Good,”だけでなく, “Great!” “Nice!” “Well done!” など、変えて言うことが必要だと思いました。(S5)」

「小学校ボランティアに行くことによって使う機会が上高野へ行き始める以前よりも断然に増えていますし、クラスルームイングリッシュも使えるようになってきたのではないかなと感じております。例えばグループを作ってグループごとに座らせるときの“Make a circle”などですかね。特に小学生相手なのでそういった簡単な単語でポンポンと言えるようになってきました。周りの先輩方や友達など僕よりもボランティアに慣れている人たちの真似をするうちに、ですかね。(S4)」

一方留学経験のある学生は特に回数を重ねてもクラス英語の上達については言及がないし、回数の少ない人はまだ上達への自信を持てるほどの変化が起こってないようである。S8のように幼少期からの英会話クラス受講経験により、クラスルーム英語を既に使えるレベルに達しているが、子どもを前にして使うのに慣れていないのだけの場合、クラスルーム英語を実際の子どもの目の前にして使うことに慣れてきたことが分かる。

「たぶん最初に比べて断然英語を使っているな、と自分でも思います。5月に比べて2月のほうがずっと英語をしゃべっていますし、なるべく日本語で補おうとは、してなかったと思います。(S8)」

次に S4, S5 のように教員志望で、留学経験や幼少からの英会話教室への通学経験がなく、参加回数が多い学生は児童の英語の発話や理解するのを促す工夫として、自分が用いるストラテジーが具体的に言える特徴があると思われる。例えば「ルールを破って、日本語で話してしまった場合の対処は？」という面接者の質問に対して S5 は以下のように具体的に回答している。

「考えを褒めた後, “In English.” などと言って, 英語で言うように促します。(S5)」

また S4 もアウトプットを引き出す工夫として以下のように具体的な方略を述べている。

「つまっていたらゆっくり最初の部分だけ発音してあげて子どもたちが思い出すのを助けてあげたりします。これもやはり先輩を見ているうちになんとか子どもたちに思い出させよう

とする方法が身についてきたのではないかと思う。とりあえず日本語で意味を確認したうえでそれを英語で思い出させたりします。(S4)」

また理解を促すためにしている工夫として S5 は以下のような方略を具体的に報告している。

「絶対にしていることは、英語で言い直していることです。子どもがわからない単語があったときに、英語で言い直し、できれば子どもにも言ってもらおうようにしています。“Say together.” “Repeat after me.” などと言えば、比較的一緒に言ってくれる子が多いです。(S5)」

一方、参加回数が少ない学生の場合はアウトプットを促す方法として、アドリブで行うとか、日本語で「～は何ていうの?」と言ってしまふ、英語を使わざるを得ない仕掛けを作るとか、チャンツでしっかり言わせるなど、実際発話に困っている生徒を目の前にして施せる具体的な方略ではなかった。理解を促す方略も、物を使って説明する、児童の目線で話す、大きな音を立てて注意を引くなど S4 や S5 が報告しているようなクラスルーム英語を用いた工夫とは異なっていた。

5. 考察・まとめ

本節ではアンケート及びインタビュー結果分析から得た示唆を基に、序章で設定したリサーチクエスチョンに回答したい。

まず、今年度の実践の評価と今後の活動への示唆であるが、参加児童によるアンケートからは、活動が全般的に「楽しい」という評価を概ね得られ、学生によるアンケートからも「楽しんでもらえた」と実感している様子がうかがえた。しかし、「楽しさ」を与えるだけでは英語活動の本質的な目的に応じていることにはならない。やはり、参加児童の英語力の定着を確実にし、児童自身にも英語力の伸びを実感してもらえるような活動を目指すべきであり、そのためには参加学生が適切に授業を省察できる目を養うべく、多角的に分析できる視点を提示する必要がある。「生徒を楽しませられた」、「主体的に取り組んだのでやりがいを感じた」といった偏った評価の仕方だけではなく、英語が定着していたか、英語の発話を促す工夫がされていたか、最終的に産出活動で成功すべくインプットや練習が行われたか、等の視点で授業を評価できるよう、「批判的省察」ができる能力を養成することが大事であると考え。指導計画や活動の実施方法の指導だけではなく、毎活動後に指導者側が様々な角度からの評価を行い、徐々に学生同士で多角的に評価できるよう導くことで、授業を組み立てる時点でもその養った視点を活かせられると考える。

次に、参加学生の指導技術と意識に与えた影響についてであるが、インタビューの結果からこのプロジェクトが教員養成プログラムを補強するという意味で重要な「学びの場」を与えていることが分かった。全般的な傾向として、複数回この活動に参加することで、授業の組み立て方や

教材作りに関する理解が深まったようである。教授法に関しては、大学の授業で学んだことを、実践を通し、より一層理解を深めたためであろう。さらに大学で大学生を生徒に見立てて行う模擬授業とは異なり、小学生と直接接することで、様々な予想外の躓きを体験し、いかにして子どもが理解しやすく、英語を発しやすい指導を行うかを実践的に理解したようである。子どもを教える上での疑問や不安は絶えないが、想像以上に理解してくれていたたり、英語を話してくれる場面を見て、指導技術における自信につながったようである。参加回数が増え、ある程度のレベルに達すると、特に留学や幼少期の英会話クラス受講体験がない場合、クラスルーム英語の使用が著しく上達することも分かった。さらに参加回数が多くなると、子どもの理解や発話を促すための方略が身につく、それを具体的に報告できるまで意識化していることも分かった。このように参加回数を重ねることで気づきを言語化できるようになっているということは、単に活動に慣れただけでなく実践後に意識的に振り返る習慣が身についていることも示唆しており、実践後の振り返りの重要性と効果を示していると考えられる。また指導の体験からだけでなく、ピアからの学びも指導技術向上に大きく貢献しているということも分かった。一方で指導方針や活動への思いの違いが非効率さを生み、本プロジェクトの否定的な評価の大きな原因となっていることが分かった。学びの効果をより大きくするためにも指導方針について共通理解を持ち、授業を分析的に計画したり、皆で実施した授業の内省を共有できる意識と能力を養成することが重要であると考ええる。

以上のことから、このプロジェクトは授業等で得られた理論や概念を用いて現場の問題を解決すべく実行に移し、また新しい問題に出会い、次なる新たな知識の獲得につながっていくという「実践→内省」の循環を経験できる貴重な経験学習の場を提供していることが分かった。実践指導力を高めるためには実践者としての自らの経験を分析する研究手法を身につけることが重要であり、本コースにおいても授業と連動させてこの活動で実践経験を多面的に分析検証する視点を養うことが、重要な課題であると考ええる。

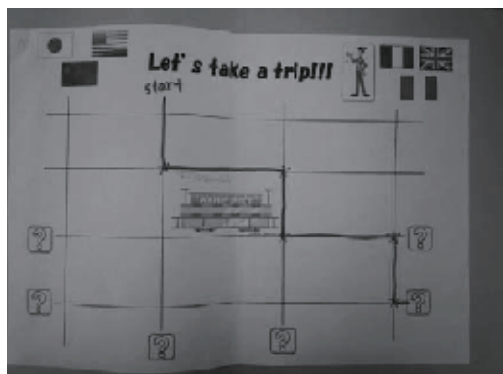
謝 辞

本ボランティアを行うにあたって、上高野小学校の前谷康孝校長先生、藤木茂之教頭先生、また上高野小学校関係者各位に多大なるご協力を賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、この縁をつないで下さった親愛なる同僚 Kevin Ramsden 先生と Mrs. Takako Ramsden 様にも御礼を申し上げたく存じます。皆様方のご協力無しでは、本研究成果が生まれる事はありませんでした。また貴重な学びの機会を与えてくださった安岡寺小学校の高田聖美先生及び安岡寺小学校関係者各位に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 相川真佐夫他『専門職としての英語教員を目指した教員養成カリキュラムに関する総合的研究』
2010年度学内共同研究助成報告書（第1報）京都外国語大学・京都外国語短期大学 2011.
- 相川真佐夫他『専門職としての英語教員を目指した教員養成カリキュラムに関する総合的研究』
2011-2012年度学内共同研究助成報告書（第2報）京都外国語大学・京都外国語短期大学
2013.
- 石上浩美他「教員志望大学生の体験による学び」（『大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学』61
(1) 2012 pp. 117-130.）
- Kolb D. A. *Experiential learning: experience as the Source of Learning and Development*. Englewood
Cliffs, NJ Prentice-Hall 1984
- Liu Y. & Fisher L. “The development patterns of modern foreign language student teachers’ concep-
tions of self and their explanations about change: three cases” (*Teacher Development Vol. 10-3*
2006. pp. 343-360.)
- M. スラッターリ他『子ども英語指導ハンドブック：指導者の養成・自習のために』オックス
フォード大学出版局. 2003.
- Takaya F. *Interesting and Effective English Learning Activities for Elementary School Students*.
Graduation thesis submitted to Kyoto University of Foreign Studies. 2012.
- Wallace, M. J. *Training Foreign Language Teachers: A reflective approach*. Glasgow. Cambridge
University Press. 1991.
- 吉田真美&相川真佐夫「英語教員養成プログラムを補う実地型活動に関する事例報告：小学校英語
活動ボランティアと台湾英語教育研修について」（『京都外国語大学研究論叢』79号 2012.
pp. 49-71.）

付録1 「道案内で世界旅行」の活動の様子と教具



付録2 上高野小学校 土曜英語活動アンケート

2/16/2013

上高野小学校の皆さんへ

全8回の英語活動は今回が最後となりました。これまでをふり返って、感想を聞かせて下さい。

1. 毎月の英語活動が楽しかったかどうか教えてください。例にならい、自分が思ったところに✓マークを入れて下さい。おぼえていないところは✓マークをいれないで下さい。写真を見せるので、一緒に記入していきましょう。

	テーマ	とても 楽しかった	楽しかった	どちらとも 言えない	楽しく なかった	全然楽しく なかった	参加して いない
例	クリスマス		✓				
5月	箱の中身は？						
6月	田植え						
7月	紙飛行機で タッチフット						
10月	ハロウィーン						
11月	道案内で世界旅行						
12月	サンタになろう！						
1月	人間すごろく						
2月	バレンタイン						

2. 来年4年や5年生になるお友達に、この英語活動の会をすすめたいですか？その理由も選んで下さい。

強くすすめたい すすめたい どちらとも言えない すすめたくない 全然すすめたくない

<すすめたい理由>

英語力が伸びたから 英語が好きになったから 活動が楽しかったから 先生がよかったから

その他

()

英語力がつかない 英語が嫌いになったから 活動が楽しくない 先生がよくない

その他

()

3. 先生はどうでしたか？当てはまるものにをしてください。いくつをしてもかまいません。

親しみやすかった 説明がよくわかった おもしろかった やさしかった

英語がうまかった きびしかった こわかった たよりなかった

その他に先生について何かあれば書いて下さい。

[]

4. 何か他に感想があれば書いて下さい。また、今後したい活動などはありますか？

[]

ご協力, ありがとうございます。みんな元気でね！